

<論 評>

日本における尊敬の社会心理学的検討

杉 江 修 治

はじめに

日本文化は均一性の程度が高く、人々は対人関係の上で、相手の意図を読み取ることが容易であるという、不確定性の少ない、安心感のもてる対人関係の中で生活している。そこでは、特定の他者の資質を厳しく評価した上で、自分の責任において判断するという行動が少なく、対人関係は緩やかなものとなる。この緩やかさは、尊敬という社会的態度の側面で二つの特徴をもたらしている。その一つは、日本では、尊敬は両親に最も多く払われ、身近な人への愛着と混同した理解がなされている点である。さらに一つは、緩やかな人間関係は階層差を曖昧にするため、かえってフォーマルな場面での立場を鮮明にするための儀式的で真情を伴わない尊敬行動が整備されているということである。但し、近年、後者の文化は薄れてきている。

本論では、尊敬に関する意識調査データを中心に、上記の日本における尊敬の特徴を明らかにし、それらの特徴を導く文化的な背景と課題を検討した。

1 尊敬の意味、尊敬への学問的、実際的関心

(1) 尊敬の意味

「尊敬」は、国語辞典では次のように解説されている。

「その人の言動，業績の中に非凡な点のあることを認め，自他の模範に足る存在として仰ぎ見ること」(山田・他 2005)

「他人の人格や行為を高いものと認め，頭を下げるような，また，ついていきたいような気持ちになること」(西尾・岩淵・水谷 1983)

2つの辞典では，日本語の尊敬は，自分自身と比べて何らかの領域で高いと認知できる他者に対して抱く行動，または感情だとしている。そこでは，尊敬を社会的態度に近いものと理解している。ただ，2つの辞書の説明には違いも見られる。山田・他(2005)では，人の言動と業績という，表出されたことがらを尊敬対象の属性としており，西尾・岩淵・水谷(1983)は，人格という，推測される特性を属性に加えている。なお，「仰ぎ見る」「ついていきたいような気持ちになる」というように，尊敬する側とされる側には明らかに上下の関係がある。ただし，「ついていきたいような気持ち」には従属的意味合いが強く，「その人のようになりたい」という同一視と同じ意味だと受け取ることはできない。

一般的に，人は，特定の人に対して，その人が尊敬に値するという認知とともに，その人に対する好意的な感情を持ち，その人に接近する，またはその人に同一視しようとするというような，感情面，行動面の変化を起こし，尊敬という社会的態度を形成する。ここでは尊敬は心理学的な検討課題となる。

しかし，一方，権威や権力を持った人は，尊敬しなくてはいけない対象であると潜在的，顕在的に規定し，パターン化された尊敬行動を要求するという形もある。権威に対する服従行動も，尊敬と呼ばれることがある。こちらは社会学的な検討課題である。

社会的態度としての尊敬は，文化を超えて存在するであろう。自分より優れた資質，行動，人格に出会ったとき，人はその対象をすばらしいと評価し，憧れを持ち，時にはそのようになりたいという動機づけを得るだろう。しかし，尊敬という一つの語には，文化の違いに応じて，その意味にさまざまな違いが入り込む可能性がある。日本文化のもとでは，辞書の意味に加えて，権威への服従というような意味合いが強いようにも感じられ

る。

(2) 尊敬への心理学的関心

日本の心理学では、「尊敬」に関する研究は極めて少ない。いくつかの代表的な心理学事典や心理学ハンドブックでは、索引に「尊敬」の語を見いだすことができない(梅津・他 1981; 依田 1977; 中島・他 1999; 東・繁多・田島 1992; 久世・齋藤 2000)。また、社会学事典でも同様に、尊敬の語の紹介はなく(見田・栗原・田中 1988; 森岡・塩原・本間 1993)、哲学事典(林・他 1971)では、わずかに Kant, I. の Achtung の短い解説がなされているに過ぎない。

また、1995年以降に国立国会図書館に収蔵された雑誌論文の中で、尊敬をキーワードとする実証的研究は3篇にすぎず、その他には、世論調査などに尊敬を項目としたものや、若干の論説を見いだすことができるのみである。

(3) 尊敬への教育的関心

日本では、教育政策の基本的な方向を文部科学省が決定する場合、専門家を集めた中央教育審議会による答申が重要な位置を占める。

1996年7月4日に出された答申、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、約90,000字をもって、新しい時代を迎えてどのような教育を行うかの方針を、学校教育、地域と家庭の役割、今後の教育課題などに関して広範に論じた。しかし、この中に尊敬という2文字は、情操教育の目標としても、特定の対象に対する態度形成の目標としても、一度も入っていなかった。

「戦後さまざまな事情から尊敬ということばは軽視され、今日子どもたちが歴史上の人物や老人、両親、先生など目上の人を尊敬するという意識は相当薄くなってきている」(李・横山 2002a)というように日本の実態が報告されているが、教育的関心も同様の方向にあるように思われる。

子どもの保護者調査からも、尊敬の位置をうかがうことができる。ベネッセ教育研究開発センターの調査(2006)では、子どもの将来に対する保護

Table 1 子どもの将来に対する期待 (3~5歳の幼児の保護者の回答) (%)

	東京	ソウル	北京	上海	台北
まわりから尊敬される人	12.0	28.3	45.5	43.0	23.2
友人を大切にする人	74.5	14.3	14.2	11.3	13.9
リーダーシップのある人	6.1	46.8	15.5	25.6	22.4

者の期待を、東京、ソウル、北京、上海、台北の5都市で調査した。その結果を Table1 に示そう。東京在住の保護者は、明らかに他の4都市に住む保護者に比べて、自分の子どもが「まわりから尊敬される人」になることを期待する度合いが低いのである。

(4) 尊敬の反対語から

「尊敬」の反対語は「軽蔑」ないしは「侮蔑」とするのが一般的であり、単に「尊敬していない」というような中立的な意味ではなく、対象を否定的に評価した意味をもつことばである。「軽蔑」の組織的な研究も、尊敬と同様、日本ではほとんどなされていないが、日本の最近の若者が他者を「軽蔑」する傾向が強まってきていることについては速水(2006)の議論がある。

彼はまず、今の子どもは20~30年昔の子どもに比べて感情の表出がどう変わったかを、経験ある多数の教師へのインタビューによって検討した。そこでは、今の子どもは昔に比べて「怒り」の表出が増え、「悲しみ」「喜び」「恐れ」「驚き」の表出が減ってきたという結果が得られた。さらに、多数の国際比較データから、日本の若者が、他国と比べて明らかに、自信や有能感が低いことも明らかにした。大学でのサークル加入率は年々低下し、孤立化の傾向も高まってきていることを指摘した。

その一方で無作法な行動で他人に迷惑を及ぼすことが増え、自分ひとりが優れていると思っているのではないかと推測させるような言動が増えてきているという。速水は、これらの現象を指摘した後、「ここで示される自己肯定感は、自分の確固たる経験に基づかない、社会の雰囲気や運に左右された、主観的で不安定なもの」とまとめている。

速水は「他者軽視を通して生じる偽りのプライド」を「仮想的有能感」と名づけた。確かに、現代はこのような偽りの有能感を形成する機会に満ちている。ネットの中でのバーチャルリアリティの世界、能力に関係なくだれもが大量の情報を得られる環境、豊かさの中での個人の責任の希薄化など。そしてとりわけ、安心社会の中で過ごしてきた日本文化のもとでは、こういった現象は対人関係の希薄化を加速しやすい可能性がある。若者に限らず、これが成人社会にもさらに急激に広がる可能性がある。尊敬のある社会に向かうどころか、軽蔑の蔓延した社会に移行する懸念なしとはいえないのである。

2 尊敬に関する実証的データの検討

(1) 小学生の尊敬意識

李・横山 (2002a) は、日本の小学6年生の尊敬意識の実態を質問紙調査によって分析している。その結果、以下の諸点が明らかとなった。

- ① 尊敬ということばの意味は分かっているという子どもが90%を越えること。
- ② 子どもが理解する尊敬には、その人のようになりたいという同一視の観点がうかがえること。
- ③ 尊敬されることは、90%以上がよいことと捉えているが、尊敬されたいと願う者はそこから20%少なくなること。
- ④ 地位や年齢が自分より上の人を尊敬するように教えてもらった経験は、40%弱であること。
- ⑤ 尊敬の対象は、「心優しく、自分より優れたところがあり、礼儀正しい」人であり、金持ちや有名人をあげるものが少なかったこと。
- ⑥ 尊敬の対象は、家族、血縁関係者が多いこと。
- ⑦ 75%の子どもが尊敬する人のようになりたいと答え、88.9%が、その人が好きだと答えたこと。

ここでは、日本の小学生の間では、尊敬は良く知られたことばではあるが、尊敬について教育される経験は多くないことが示されている。その実

態には、Table1で示された、保護者の子どもへの期待もかかわっていると思われる。尊敬の対象は身近な人に限られる傾向があり、愛着行動と類似した概念として捉えている可能性を見ることができよう。

李・横山(2002b)では、2002aの彼らのデータを、中国の小学生と比較した。中国も日本も、漢字文化を共有しており、儒教道徳を取り入れた国であり、年長者への尊敬を尊重する文化を持つとされている。しかし、両国の小学生の尊敬理解には、次のように大きな違いが見られた。

- ① 尊敬することの価値を高く認めている点は両国共通であるが、中国の子どもは、自分も尊敬されるようになりたいと考える傾向が強いこと。
- ② 地位や年齢が自分より上の人を尊敬すべきだという考えが、中国の方が強いこと。
- ③ 尊敬することを教えてもらった経験は、中国ではほぼ100%にのぼること。
- ④ 尊敬の対象として、中国では優しさなどに加えて、年長であること、知識があることをあげていること。
- ⑤ 尊敬の対象として、中国の子どもは両親より祖父母をあげることが多く、学校の先生をあげる割合も日本より多かったこと。

年長者や地位の高い者への無条件の尊敬を求める、儒教道徳に沿った回答が、中国では強く見られる実態が示されている。また、尊敬ということがらへの評価と、自分も尊敬されたいと考える者の割合の差が、中国では小さかった点、尊敬についての教育を受けている者が多い点などは、日本に比べて、中国では儒教道徳が生活に根付いていることをうかがわせる結果である。

(2) 中学生、高校生の尊敬意識

日本青少年研究所(2000)は、15歳から18歳の中・高生を対象とした生活実態の日・中・米比較を行った。その中に尊敬およびそれと関連する内容の質問がある。父、母、教師、友人を対象とした認識を質問した結果を中学生のデータについて示してみよう(高校生もきわめて類似した結果

Table 2 日本の中学生の意識調査

(%)

		日本	合衆国	中国
尊敬すべき人	父	31.0	46.5	72.8
	母	26.9	51.4	71.8
	教師	12.8	25.8	79.5
	友人	20.8	24.4	25.9
従うべき人	父	36.2	39.5	67.8
	母	24.7	26.4	70.6
	教師	24.4	24.6	54.1
	友人	5.8	10.8	4.9
表面的につき合う人	父	6.1	14.9	8.0
	母	6.3	15.6	2.5
	教師	48.8	19.6	27.6
	友人	28.3	22.6	22.6

であった)。

これを見ると、中国の中学生は、日米の中学生に比べて、明らかに両親と教師を尊敬の対象としている程度が高い。また、従うべき人という認識も強い。一方、日本の生徒は、父母、教師共に、合衆国の生徒と比較しても尊敬の対象とすることがより少ないという傾向であった。日本の中学生は、小学校で見られた結果のように、中国と比較して尊敬を示す回答が少ないだけでなく、合衆国の中学生と比較してもそれが少ない。そこには、単に儒教的な道徳観が弱くなったという以上の、特有の文化的特徴を推測できるのである。

「尊敬すべき人」以外にも、「従うべき人」への回答では、日本の生徒は中国に比べて従うべきだという回答が少ない。これは合衆国と類似した結果であった。さらに「表面的につきあう人」だという質問には、教師に対して、日本の生徒は約半数が同意する回答をしている。これは合衆国、中国に比べて明らかに多い割合である。身近な両親に対しては心を通じ合わせても、権威を伴う相手とは、尊敬する、しないというより前に、深くかわからないようにする行動傾向が明らかに認められるのである。「師の影は七尺さがつて踏まず」というようなことわざに見られる教師への心服に

基づく尊敬行動は、辞典の中だけのこととなっている。

(3) 日本の子どもの尊敬意識の特徴

国際比較を含む、以上のデータは、日本の子どもの尊敬にかかわる意識の特徴をある程度明らかにしてくれている。

日本の子どもは、小学生のころから、尊敬ということばに慣れ親しんでいるが、他人に対する尊敬を促すようなしつけを受けることが少ない。また、きわめて身近な対象に対して尊敬の心情を抱くが、年長であるとか、自分にはない経験を持つとかいう他者に対して、無条件に尊敬の感情を持つことは少ないようである。教師に対しては、日ごろ学校生活で十分な触れ合いがあり、対人関係の実態では悪いことは少ない（ベネッセ教育研究所 1996）にもかかわらず、日本の中学生、高校生は、尊敬という形での感情を抱くことが、中国はもとより、合衆国よりも少なかったのである。尊敬という次元での他者とのかかわりをもつということが、日本の子どもは少ないようだといえよう。

3 なぜ日本では尊敬が表面に出てこないのか

(1) 日本人の対人関係

日本人は集団主義的だとしばしば指摘されてきている（浜口・公文 1982；南 1994）。日本人には、集団での安定的なすごし方を可能にする技能が身につけており、対人関係の深まりがあるように推測されがちである。しかし筆者自身の印象では、日本人の対人関係は全般的に浅いレベルにとどまっており、心を深く結び合わせるような関係はむしろ少ない。高野・櫻坂（1997）のように、集団主義と個人主義に関する日米比較を行った9つの実証的研究を吟味し、日本人はアメリカ人に比べてより集団主義的だという通説は支持できないと結論づけている研究もあるのである。

Yamagishi & Yamagishi (1994) は、信頼に関する一般的態度の日米比較を行っている。「ほとんどの人は、基本的に正直である」「ほとんどの人は、信頼できる」「ほとんどの人は、基本的に善良で親切である」「ほと

んどの人には他人を信頼している」「私は、人を信頼する方である」「たいていの人には、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する」という6つの質問への回答の合計で、大学生、社会人、男性、女性、いずれでも、日本人はアメリカ人と比べて信頼感を示す得点が統計的に有意に低かった。

日本人は、ここに見られるように、人に対して信頼感を持つことが少ない。すなわち、信頼という対人関係の重要な次元の問題について、自分自身で決定を下さなくてはいけないようなことを避ける傾向がある。山岸(1998, 1999)は、安心は、社会的不確実性が存在しない状況での対人関係であり、日本のようなほぼ単一な民族で構成され、同質性の高い文化のもとで見ることができると述べている。安定的な関係が保たれている場合、人は深刻に相手进行评估しなくても生活していくことができる。しかし一方、それだけに、深い理解を交し合う対人関係が形成されにくく、そのようなことは苦手な文化だということもできる。

山岸・他(1995)では、「社会的不確実性は、コミットメント形成を促進する」という仮説を検証している。日本のような社会的不確実性の低い文化では、対人的なコミットメントは形成されにくいことが理解できる。

尊敬は、尊敬する本人にとっては、対人的な緊張を伴う判断を経なくてはならない。尊敬される側にも責任という緊張が伴う。対人的なコミットメントに踏み込む決心が必要なことからである。信頼関係の形成と同じように、安心関係のもとで対人的行動を過ごしてきた日本人には、苦手な行動に位置づくものになるのではないだろうか。Table 1に見た、子どもに「リーダーシップのある人」という資質を期待することの少ない保護者の態度も、この文脈で理解できるように思われる。

(2) 儀礼的な尊敬

日本は、1868年の明治維新から1945年の第二次世界大戦まで、天皇を戴く帝政を敷いていた。世界戦略で先を行く欧米に追いつくために、国内ではさまざまな制度づくりが行われた。国民が国の殖産興業の人材として育つための仕掛けが幾重にも重ねられた。その一つに、江戸時代の支配階

級であった武士の倫理、儒教の流れを引く朱子学を、すべての国民に求める教育の実施があった。その内容は、明治天皇の名前で出され、繰り返し教育現場で読まれた「教育勅語」に集約されている。天皇と国に対する無条件の忠誠心と親に対する無条件の孝行心を、外側から植え付ける内容である。

敗戦後の教育では、戦前の教育の一掃を図った。忠誠心ばかりでなく孝行心までも避ける風潮があった。尊敬が公の場であまり語られない大きな理由はここにあると思われる。

敗戦後も、日本では、憲法に明記された国の象徴としての天皇は存在している。この天皇に対する感情を継続的に調査した資料がある。NHK放送文化研究所(2004)は、天皇に対する感情を「尊敬」「好感」「無感情」「反感」の4つの選択肢で回答を求めた調査を行った。「戦争経験があるか戦争中の教育を受けた者」「戦後生まれの者」それぞれに回答を求めた。結果の一部を次に示す。

この調査は1973年から始まり、2003年まで5年おきに実施してきている。88年と93年のデータの間には、「戦前・戦中育ち」「戦後育ち」のいずれの回答者も、天皇に対する感情が「尊敬」から「好感」へと大きく変化した。73年から88年まで、データの大きな変化はない。93年のデータも、それ以降のデータとの間に大きな差はない。88年と93年の間に大きな差が生じたのである。その原因は明らかで、1926年から第二次大戦を経て、長い間天皇として在位していた昭和天皇が1989年に亡くなったことによる。戦前の生活経験を持つ者には、外から教え込まれた昭和天皇に

Table 3 天皇に対する感情 (%)

		尊敬	好感	無感情	反感	N.A.
戦前・戦中育ち	1988	52	24	21	1	2
	1993	42	41	14	1	3
戦後育ち	1988	17	24	55	2	2
	1993	12	50	35	1	1

に対する尊敬の念が定着しており、容易にそれを拭い取ることはできなかった。しかし、国民が、幼い時から成長を見守ってきた皇太子が天皇を継いだとき、感情は、大きく好意、愛着の方向に変化した。形としての尊敬が、場を失ったのである。

戦後世代は、戦前の教育を受けず、一方で軍国主義に対する警戒から、天皇制からは距離をおく姿勢が強かった。しかし、天皇の交代により、日ごろからマスコミを通じて馴染みのある、そして国民に対して強圧的な働きかけは何もしなかった新天皇に対して、好意的な態度を持つようになったと考えられるのである。

このデータから推測できることは、まず、日本人にとって天皇に対する尊敬は、明治から第二次大戦の敗戦の間に作られたもの、強制されたものであり、畏敬という表現の方がむしろ適切であるように思われる。文化の中に根付いていたものではないことである。制度としての天皇への尊敬心は定着していなかったことを示している。さらに、天皇という特別な対象であっても、権力による権威づけが行われなくなったことで、不確定性の低い日本の文化の力が上回り、好意、愛着という、緊張のない関係を作っていたと考えられるのである。

日本の子どもたちは、身近な父母に対して尊敬の気持ちを持つと回答する者が多かった。この尊敬は、中国や合衆国における尊敬と質は同じだろうか。日本では尊敬の中に好感、愛着という要素が強く入り込んでいる可能性が強いのである。

(3) 敬語の意味

日本のことばには、「敬語」という語彙と用法がある。これは、自分より身分の上の人に対して特別に用いる話し方であり、その複雑さは、日本語習得の障害の一つにあげられるほどである。

敬語には「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の3種類がある。ある。尊敬語は、相手を尊敬していることを含む表現である。地位の上の人に物を与えるときは、「さしあげる」と表現し、物を頭より高く掲げて渡す行動をイメージさせる表現をする。謙譲語は、相手より自分を低いものと表現する

ことで、相対的に相手を高めることばで、物をもらう場合「いただく」という、頭を下げて礼をする行動をイメージさせる表現を用いる。丁寧語は、十分な気づかいをしていることが分かるような、相手を大切に扱う特別な表現をするものである。

近年、この敬語が使われなくなってきたという指摘が、しばしばなされてきている。李・横山(2002a)にあったように、家庭内のしつけの中で尊敬を教えられていないという現状が、その大きな原因であろう。しかし、もう一つ要因があるように思われる。

日本には複雑な敬語があるので、尊敬に関する文化が育っているという推測は、筆者は当たっていないと考える。すなわち、敬語とは、心がこもっていなくても、形で交流することのできる儀式的な工夫ではないかということである。日本では、天皇家の周囲に貴族はいたが、長く武士に権力を握られ、貴族という階級を形成していても、権力はきわめて弱かった。貴族を除く人々の間に階層差はあっても、その所属は流動的であった。武士も商人や農民と共存して生活をしており、階層の出入りが閉ざされていたわけではなかった。明治以降は軍人が強い権力をもったが、その軍人には、男ならばほとんど誰でもなることができ、昇進は家柄によらなくとも可能であった。すなわち、日本の文化では、身分階層の流動性は高かったのである。

しかし、日々の生活の中では、その場その場で微妙な差が存在する。その差に折々に対応する装置として敬語が工夫されたという可能性がある。敬語は時に過剰に使われる。階層の高い者が低い者に対して使うことさえ珍しくはない。身分の境界があいまいであり、話題や仕事の内容によっては序列が入れ替わることさえあり、その場合も想定して対応を工夫するのである。平等的な社会であるがゆえに微妙に生じる身分、階層の差を曖昧化するための、フォーマルな相互作用の様式が必要であるということが、敬語を発達させた理由の一つではないかと考えられるのである。そこでは、「尊敬という形」を表現するのであり、「尊敬の心情」を含まない場合がしばしばある。儀礼としての尊敬がそこにある。儀礼的な行動は真情とは別物であるから、強制されなければ消えていくのは必然である。そしてこれ

が消えていくのを助長する近年の動向として、「仮想的有能感」の中で生きる若者の対人関係技能の未成熟ということがある (速水 2006)。

なお、土居 (1971) は、敬語について次のように述べている。

……日本では子どもに対しても丁寧なことばをよく使う。「おりこうさんね」の「お」、「お洋服」の「お」など。これは子どもの機嫌をとっているのだが、敬語も目上の人の機嫌を取るためのものではないか。目上の人は子どもと同じように機嫌をとらなくてはいけない人なのであり、成人してもそういうことを暗黙に要求するような子どもっぽさを日本のおとなは残しているのだ。

こういう観点から敬語使用の減少を見ると、子どもっぽさに対する日本人の感受性も低下してきているのではないかと考えることができる。また、形式的な敬語使用は、相手を子ども扱いしていることに通じ、失礼なことだということへの感受性も低下しているといえる。

ファーストフード店、コンビニエンスストアなどで、マニュアルによって一律に店員に教育されている接客用語には、しっかりと敬語が復活してきている。そこでは若い店員が自身の日常では決して使わないことばでてきばきと接客をする。客は店員のマニュアル接客に従って回答をしていく。そこには形としては適切な客 - 店員という関係が構築されるが、同時に顔を付き合わせたコミュニケーション場面でありながら、相互作用はきわめて形式的になる。对人的真情の入り込むことはなく、また、真情を込めずに済む気楽さがある。しかし、こういった形だけの、真情を背景としていないことば遣いは、結果として、仮想的で、実質的には不安定で、浅い対人関係の広がりをもたないように思われる。

(4) 依存的人間関係と尊敬

土居 (1971) は、日本人の人間関係の核心に「甘え」があると指摘した。甘えは、「甘い」という味覚の用語から派生したことばであり、相手が厳しい対応をしないことを期待して働きかけ、働きかけられた方も、期待通

り相手を追い詰めるようなことはせず、問題があっても、ほどほどのところで容認し合うような行動を言う。

第二次大戦の敗戦までは、日常生活ではこの甘えが蔓延していたとしても、一方で天皇制という甘えを許さない仕掛けがあった。また、父系の主導性を強調する「家制度」も存在していた。しかし、敗戦によってその枠が共に一気に崩壊した。民主主義は形としては整ったものの、国民は個の確立に向かうのではなく、甘えに漬かった文化に立ち戻ってしまった。厳しい人間関係に慣れていない文化の元では、問題の追及も中途半端で終わることが多い。さまざまな汚職が繰り返されても、戦後の大部分を保守政党が政治を独占してきたのも、甘えの文化の所産である可能性が高い。1960年代の、高度経済成長によるライフスタイルの変化は、人間関係のあり方に混乱をもたらし、その結果、日本的甘えの人間関係が広がる傾向に拍車をかけた。

儒教道徳は、上からの暖かい保護が前提である。上の者の責任は重大である。上の者が責任を果たさなければ、この道徳は機能しない。しかし、上の者の責任を下の者が深く追及することなく、緩やかな形でこの道徳が受け止められていけば、次第にその意義は薄れていく。日本では、儒教道徳は中国から輸入したメッキの道徳に過ぎなかったのである。社会で要求される責任は、民主主義社会でも同様に大切な条件である。甘えの文化の中では、責任を伴わない行動が増え、他人まかせの政治が進んでしまうことになる。

甘い人間関係のもとでは、他人の特性に対する判断も緩やかになる。小杉・山岸(1995, 1996)では、他者を信頼する傾向の強い人間は、他人が信頼できるかどうかを示唆する情報に対して敏感で、また、実際に信頼に値する行動をとるかどうかの予測が正確だという結果を得ている。他人を信頼することの少ない日本人は、人を、信頼という窓から見ずに、疑いの窓から見ることが多く、かえって騙されやすい、お人よしの行動をとってしまうことになる。このような対人認知能力の低さは、尊敬に値する人を見分ける力にもかかわってくるだろう。若原(2003)は、日本の青年には親への愛着的、尊敬的評価が高いことを報告している。そこには安定的な

親子関係を見ることができるとは、他の調査でも見られたように、身近な両親を尊敬の第一番の対象としてあげている日本の子どもたちの回答は、選択の世界を一步広げるということに臆病であることの証拠かもしれない。この閉鎖性は、異質なものを排除する行動傾向を助長している可能性もある。

4 教師への尊敬

(1) 日本の教師の現状

日本の教師たちは優秀であり、学力の国際比較では、子どもたちを常に上位に位置させてきた。不登校や非行なども先進国の中では少ない。しかし、それにもかかわらず、教師たちは、国内では社会的にプラスの評価を受けてきていない。子どもたちからの尊敬を受けていないことは、先のデータに見たとおりである。

日本の教師たちは、特に優遇されているわけではない。むしろ、近年の教育改革の中で、一気に多様な変化を強いられ、対応に追われ多忙化している (荻谷 2002; 藤田 2005)。教師へのストレスは増加傾向にあり (大阪教育文化センター教師の多忙化調査研究会 1996; 伊藤 2002)、精神疾患による休職は年々増え、文部科学省の発表によれば、2005年は10年前の3倍、教員全体の0.4%となっている。また、学級規模の縮小の必要性が繰り返し論じられてきているにもかかわらず、1クラスの生徒数の基準は、依然として小学校、中学校、高校共に40人であり、学級経営が容易ではない条件のもとで努力をしてくれている。

非行や不登校、校内でのいじめなどの問題行動は総じて漸増してきている。生徒の規範意識の低下傾向も増大してきている (ベネッセ未来教育センター 2004)。ただ、その多くは家庭の教育力の低下に原因があると考えられるにもかかわらず、教師の指導力不足であるという論評が常にマスコミなどでなされ、家庭の責任はほとんど問われないできている。家庭と社会の甘えの皺寄せがすべて学校に及んでいる観さえある。

ただ、一部の地域では、学校の努力で子どもの適応的な問題の解決を図っ

ている。愛知県犬山市では日本で開発されたバズ学習を基礎に置いた協同学習(杉江 1999)の導入と、市費でティーチングスタッフを増やすことで、子どもの成長意欲を満たす授業づくりを進めている(杉江 2003)。子どもにとっては課題解決志向的な意味を持つ授業の充実が、適応にも効果を及ぼしており、不登校は小学校で全国平均の約3分の1、中学校で約2分の1となっている(杉江 2005)。非行についても市内の4つの中学校でほとんど見ることはない。協同学習の導入は、子ども相互、教師と子ども、教師同士を信頼と尊敬につながる一歩踏み込んだ関係で結び合うように促しているのである

(2) 公教育への評価

内閣府(2005)の調査では、中学・高校生の親の学校に対する満足度は「非常に満足」が0.3%、「満足」が10.7%、「どちらでもない」が48.4%、「不満」が32.1%、「非常に不満」が8.5%であった。満足度は決して高くはない。さらに、学校と予備校、学習塾のどちらが学力向上面で優れているかという評価では、中学生の親は「学校が優れる」という者は0.4%、「どちらかといえば学校が優れる」は3.7%、「どちらでもない」は21.8%、「どちらかといえば塾、予備校が優れる」は40.8%、「塾、予備校が優れる」は32.6%であった。高校生の親では「学校が優れる」という者は1.6%、「どちらかといえば学校が優れる」は3.1%、「どちらでもない」は23.0%、「どちらかといえば塾、予備校が優れる」は42.6%、「塾、予備校が優れる」は29.7%であった。親がどのような学力観を抱いているかという問題はあるが、学校は、学力定着の場としての評価が低いことが明らかである。

生徒に回答を求めた調査でも、学校への評価は高くない。友枝・鈴木(2003)の調査では、「学校で学ぶことが役に立つか分からない」という問いに対して、「そう思う」生徒は35.1%、「どちらかといえばそう思う」は35.1%、「どちらかといえばそう思わない」は19.3%、「そう思わない」は10.5%であった。

(3) 教師に対する生徒評価

学校における教科学習の価値の低下から、生徒も保護者も、教師に対しては教科の指導者以上に、やさしさ、人間的交流など、受容性を求める傾向があるようである（ベネッセ教育研究所 1996）。生徒の規範意識の変化は、乱れ、崩れてきており（ベネッセ教育研究所 1999a, b, c）、生徒との対応のために教師の受容的態度がますます求められてきている。教師の関心は、臨床心理学的な側面に広がりつつあり、近年は構成的エンカウンターという、臨床心理学に基づく人間関係育成プログラムを実践に活用する動きも高まってきている（国分 1992, 2000）。

しかし、そういう風潮の中では、日本文化にある甘えの人間関係とのかかわりで、厳しさを求めない教師の態度とつながって、尊敬というような生徒の態度はむしろ教師が望まない傾向が引き起こされることになる。小学生のデータではあるが、「先生やおとなを尊敬する気持ち」は10年前と比較して低下したと回答する教師は76.0%おり（ベネッセ教育研究所 1999b）、中学生では「先生をバカにしている生徒」がいると答える教師は48.7%いた（ベネッセ教育研究所 1999c）。

(4) 教師への尊敬と教育

教育は、教師と生徒の人間関係の中で交わされる営みであり、そこには、相互に信頼関係が成り立っていかなくてはならない。信頼、尊敬といった緊張感のある関係を、不確定性の低い状況の中で、安心にすりかえてしまう傾向の高い日本では、教育における相互作用も、生ぬるいものとなってしまいう可能性が高い。教師の一方的な伝達を受身で聞き、分からなくても教師が許し、生徒は学びを自分自身の課題だと自覚しなくなっていく。教師自身も、生徒からの尊敬より愛着を求めている風潮を、筆者などは感じる。それは、学びへの価値づけをますます下げ、学力低下にもつながっていきかねない。

ほぼ単一の文化のもとでの暖かさ、安定感が、新しい国際的な交流の時代に通用するのかどうか。尊敬についての実態の考察は日本の文化の課題を指摘する窓の一つとなっている。

2005年12月に、中央教育審議会の新しい答申「新しい時代の義務教育を創造する」が出た。58,000字ほどのその文書では、尊敬という2字は6回現われる。そのうち5回は教師に対する尊敬を生徒に養う必要性を指摘したものである。1回は尊敬される国家にすべきだという文脈の中でである。憲法改定、教育基本法改定の議論が高まってきているこの時期、尊敬という用語が教育の世界に唐突に出てき始めた。答申の記述は、教師への尊敬を儀礼的に教え込むというニュアンスで一貫している。尊敬される国家のイメージは明らかではない。真情に支えられていない、押し付けの尊敬はますます日本文化における対人関係をめぐる課題を深刻にするばかりであると思うのだが。

文献

- 東洋・繁多進・田島信元編 1992 発達心理学ハンドブック 福村出版
- ベネッセ教育研究開発センター 2006 幼児の生活アンケート ベネッセコーポレーション
- ベネッセ教育研究所編 1996 生徒と学級担任 モノグラフ・中学生の世界 53.
- ベネッセ教育研究所編 1999a 規範意識の崩れ モノグラフ・高校生 '99 55.
- ベネッセ教育研究所編 1999b 「学級の荒れ」をどうとらえるか モノグラフ・小学生ナウ 19-2.
- ベネッセ教育研究所編 1999c 「学級の荒れ」を考える モノグラフ・中学生の世界 63.
- ベネッセ未来教育センター編 2004 規範意識の「緩み」と「喪失」 モノグラフ・中学生の世界 76.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 藤田英典 2005 義務教育を問い直す 筑摩書房
- 伊藤美奈子 2002 スクールカウンセラーの仕事 岩波書店
- 荻谷剛彦 2002 教育改革の幻想 筑摩書房
- 久世敏雄・齋藤耕二監 2000 青年心理学事典 福村出版
- 浜口恵俊・公文俊平編 1982 日本的集団主義:その真価を問う 有斐閣
- 速水利彦 2006 他人を見下す若者たち 講談社
- 林達夫・野田又夫・久野収・山崎正一・串田孫一監 1971 哲学事典 平凡社
- 日本青少年研究所 2000 日常生活に関する調査 日本青少年研究所報告書
- 国分康孝 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- 国分康孝 2000 エンカウンターとは何か 図書文化

- 小杉素子・山岸俊男 1995 認知特性としての信頼 日本グループダイナミックス学会第43回大会発表論文集 150-151.
- 小杉素子・山岸俊男 1996 信頼と騙されやすさ 日本社会心理学会第37回大会発表論文集 288-289.
- 李・仲浜・横山正幸 2002a 日本の小学生の尊敬意識についての研究 福岡教育大学紀要 51-4, 227-236.
- 李・仲浜・横山正幸 2002b 日本と中国の子どもの尊敬意識の比較 教育実践研究 10, 113-120.
- 南博 1994 日本人論：明治から今日まで 岩波書店
- 見田宗介・栗原彬・田中義久編 1988 社会学事典 弘文堂
- 森岡清美・塩原勉・本間康平 1993 新社会学辞典 有斐閣
- 内閣府 2005 学校制度に関する保護者アンケート調査結果
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・重柵算男・立花政夫・箱田裕司 1999 心理学事典 有斐閣
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静雄編 1983 岩波国語辞典 第3版 岩波書店
- NHK 放送文化研究所 2004 現代日本人の意識構造 第6版 日本放送出版協会
- 大阪教育文化センター教師の多忙化調査研究会 1996 教師の多忙化とバーンアウト 法政出版
- 杉江修治 1999 バズ学習の研究－協同原理に基づく学習指導の理論と実践 風間書房
- 杉江修治編 2003 子どもの学びを育てる少人数授業 明治図書
- 杉江修治 2005 犬山の改革は何を変えたか 犬山市教育委員会編 自ら学ぶ力を育む教育文化の創造黎明書房 pp. 197-221.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 1997 “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”：通説の再検討 心理学研究 68-4, 312-327.
- 友枝敏雄・鈴木讓 2003 現代高校生の規範意識 九州大学出版会
- 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新監 1981 新版・心理学事典 平凡社
- 若原まどか 2003 青年が認識する親への愛情や尊敬と、同一視および充実感との関連 発達心理学研究 14-1, 39-50.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄編 2005 新・明解国語辞典 三省堂
- 山岸俊男 1998 信頼の構造一心と社会の進化ゲーム 東京大学出版会
- 山岸俊男 1999 安心社会から信頼社会へー日本型システムのゆくえ 中央公論新社
- Yamagishi, T. and Yamagishi, M. 1994 Trust and commitment in the United States and Japan, *Motivation and Emotion*, 18, 129-166.

山岸俊男・山岸みどり・高橋伸幸・林直保子・渡部幹 1995 信頼とコミットメント形成—実験研究 実験社会心理学研究 35, 23-34.

依田新監 1977 新・教育心理学事典 金子書房

(受理日 平成18年4月12日)